



Title	前田富祺先生を悼む
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	語文. 2026, 126, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106096
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

前田富祺先生を悼む

蜂 矢 真 郷

本学名誉教授の前田富祺先生が、昨年十一月一二日に八八歳で御逝去された。

何年か前に、先生の御体調がお悪いとお聞きしているけれどもどのような様子なのか尋ねてくれなしかとのメールがあり、それでお宅にお電話したところ、入院されて手術もされたが、今は退院されて通院されていると、奥様からも、先生御本人からお聞きしたことであった。耳の調子がよくないが、補聴器を使うと雑音が多くなり、却って聞こえにくいというお話もあった。今から言えば、それが先生と最後にお話したこととなっていました。いや、郵便の往復はその後にもある。

四半世紀前のことになるが、二〇〇一年三月に先生が大阪大学を定年で御退官される際には、「語文」七五・七六輯の「前田富祺教授退官記念国語学特輯」に「前田富祺先生の御退官にあたって」を記したことがあり、些か重なるところがあるかと恐れもするが、お許しいただきたいことである。

先生に初めてお目にかかったのは、第五回国語語彙史研究会

(一九八〇年九月一三日、京都大学楽友会館)で御発表された時であったか。「語彙資料としての滑稽演説」との題であった。私は和泉書院のパンフレットでその会のことを知り、参加したのであった。その日の発表者は、先生の他に、山口佳紀先生・阪倉篤義先生という豪華メンバーであった。

国語語彙史研究会は、当初、創立された三人の幹事の方がおられる神戸大学(根来司先生)・奈良教育大学(山内洋一郎先生)・大阪大学(前田先生)で開かれるのが通常で、第何回という回数(五の倍数の時には京都で開かれるようになった(後には、三大学の他でも開かれ、十の倍数の時に京都で開かれることになった)。私は、第五回に参加して以降、病氣(風疹、治っていたがまだうつす可能性があった)と交通事故(一箇月入院、退院後も暫く休職)とで、二回休んだことがあるが、先生は、コロナ禍でオンラインになるまで、全回御参加されたと見られる。

私が発表することになった最初は、第一二回(一九八二年二月一日、大阪大学待兼山会館)での「動詞の重複とツツ」であ

り、それは『国語語彙史の研究』五〔九四・五、第一回新村出賞受賞記念〕に掲載された（『国語語彙史の研究』第二集・第三集の研究業績に対して新村出賞を受賞したのであった）。

幹事三人の他に、糸井通浩先生と共に委員として加わったのは一九八九年四月である（その後、委員は、後に幹事も、徐々に増えた）。一九九〇年三月に根来先生の定年退官で、『国語語彙史の研究』十〔九六・三、第十集記念〕は、「根来司著書・論文・研究発表総目録」が掲載されていて、実質的には根来先生の退官記念でもあり、そして、代表幹事は根来先生から前田先生に移った。

一九九一年四月に私が大阪大学に転任してからは、お手伝いすることが多くなった。年三回の研究発表会を開くに当たり、案内の葉書を書くのであるが、一五〇枚を超えていたか、かなり大変であった（院生に手伝って貰ったりもし、後にメールで知らせるようになった）。当初、会費はなかったが、参加費五〇〇円をいただくようにした。四年ほど、編集主任の役をしたこともある。

前田先生の御退官にあたり、『国語語彙史の研究』二十〔二〇〇・三〕は、第二十集記念・前田富祺教授退官記念であった。そして、代表幹事は糸井先生が固辞されて私にまわって来た。その時に、編集主任を、臨時にではなく持続的な役にする（基本的に二年任期）ことにした。代表幹事になってからは、毎年、論文を投稿するようにしたものであった。

二〇一〇年三月、私が大阪大学を定年退職する際に、代表幹事を乾善彦先生に、新たに庶務主任を岡島昭浩先生にお願いした。

その後、乾先生が、関西大学での仕事が相当大きく増えて身体が持たないとのことで、二〇一八年から代表幹事を岐阜大学の佐藤貴裕先生にお願いした。

なお、前田先生は『国語語彙史研究』〔九五・一〇明治書院〕により、翌年六月、文学博士の学位を授与された。柳田征司先生の書評（『国語学』一四七号〔九六・三〕）がある。二〇〇〇年前頃に、国語審議会で表外漢字字体表などを検討されている。

さて、私が大阪大学に着任するよりかなり前からのことであるが、年二回の国語学会（後に日本語学会に名称変更される）や、年三回の国語語彙史研究会の折など、前田先生にお会いすることが多くなり、懇親会の後、先生に着いて行つて、最後はカラオケに行くことも多くなった。当初は歌える歌がなく苦労したりしたが、後には歌える歌がカラオケに増えたのであった。

当時は、国語学会の前日の金曜日の、訓点語学会や日本方言研究会の後に、ティーンエイジャーの会とも言われる、昭和十年代生まれ（ティーンエイジャーと、昭和十年代生まれとは、厳密には一致していないか）の方々の研究会があり（後に論文集『日本語史研究の課題』〔二〇〇・二〇武蔵野書院〕が刊行された際には日本語研究会とされているので、この方が本名であろう）、その後先生と御一緒したこともあるか。その会にお出での他の先生方と、いろいろお話しすることができるようになったのも、前田先生のお蔭である。

一九九八年一〇月、九州大学（今のキャンパスへの移転前）で

開かれた国語学会の時は、前日の金曜日に行かれた店に、先生が明日も来ると言っておかれたので、台風が来るのでほとんどの店が休みになっても、二次会に行くことができたのであった。

ところで、前田先生が大阪大学におられた時、忘れられない先生の御発言があるので、そのことを記しておくことにしたい。

大阪大学には国語学と日本語学とがあり、大学院や学部の改組を検討しなければならぬような時などに、思いもしない発言をされる方もおられたりして、もめる元になかなかねないようなこともあった。文学研究科長に呼び止められて、好ましくない改組案を聞いたこともあったりした。

それらよりは後のことであつたが、日本語学に工藤真由美先生が着任され、半年後に国語学に金水敏先生が着任された際に、国語学と日本語学との共同でお二人の歓迎会が川西市で開かれたことがある。その時に、前田先生は御挨拶の中で、別々にいるからここまで大きくなれた、とおっしゃったのであった。確かに、合併したりすると、教員数が多すぎるから削れと言われかねないようなことでもある。

その後に前田先生の御定年が近くなってきた頃、日本語学の真田信治先生の提案であつたと思われるが、国語学・日本語学の教員一同で、車三台であつたか、富山県まで旅行することがなされた。真田先生の郷里である五箇山^{ごかさん}を含んでいるところへ行つたが、本当に思いがけないことであつた。私は、行きは真田先生の車に乗せて貰い、真田先生と一緒に帰られず富山に残られたの

で、帰りは金水先生の車に乗せて貰ったのであった。金水先生が大阪大学を定年退職される前までであつたか、ホームページにその時の写真が載っていたものである。

前田先生は、大阪大学を定年退官された後、神戸女子大学にお勤めになった。内田康夫『須磨明石殺人事件』のドラマで、神戸女子大学が写るので、録画したものをお渡ししたことがある。二〇〇三年から二年間であつたか、国語学会↓日本語学会の会長を務められたが、名称変更に伴う御苦労が多かつたであらう。二〇〇七年の夏には、先生が古稀を迎えられる際に京都でお祝いの会があり、私も呼ばれたことがある。その翌年には、神戸女子大学を定年退職され、神戸女子大学の名誉教授にもなられている。

コロナ禍より前の国語学叢史研究会では、後には懇親会が終わる前にお帰りになることがあつても、必ずお出でであつた。コロナ禍により国語学叢史研究会は二回中止、その後はオンラインになつて、それで先生とお会いする機会がなくなつてしまった。昨年一一月末、本当に久しぶりながら対面で国語学叢史研究会が開かれたけれども、それはもう先生の御逝去の後であつた。

昨年は、国語学の先生方が全国で何人も亡くなれる年であつた。その中で、前田先生が御逝去されたのは、極めて大きいことである。今は、謹んで御冥福をお祈りするばかりである。

(はちや・まさと 本学名誉教授)